

## 【論文】

# 社会音声学序説

## ラングとパロルの中間に関する一考察

城 生 佰太郎

Introduction to Socio-Phonetics

JÔO, Hakutarô

要約：言語学の1領域に社会言語学があるのと同様に、音声学の1領域に社会音声学(socio-phonetics)の有用性を訴える。

定義は、「音声学の一分野で、音声の産出、伝播、受容・認知の3大側面に影響を及ぼす社会的・文化的な諸要因を探究することを、主たる研究目的とする」とする。方法論は、原則的に記述研究によるが、面接調査による資料収集の際に調音音声学的記述にとどまらず、高品位の録音(場合によっては録画)をも並行して実行し、後日それらのデータをことごとく音響解析して定量化することが不可欠である。さらに、場合によっては実験室まで被験者にご足労をお願いして、事象関連電位を用いた脳波実験を行うこともあり得る。

理論的枠組みとしては、一般言語学が強い関心を寄せるラングと、音声学が強い関心を寄せるパロルとの中間に位置する「norma」や「音芯論的レベル」を、基本的単位とする。

キーワード：ラング、パロル、ノルマ、社会音声学、音芯論

## 1 序論

### 1.1. はじめに

小論で扱う「社会音声学(socio-phonetics)」という枠組みは、筆者の着想によるものではない。2008年の4月ごろに、当時筑波大学人文学類、一般言語学コースに在籍していた大橋紀子氏が、「自分には、知人が風邪を引いたときの声がすぐにわかる。こういう現象は、音声学では扱わないん

ですかねえ？」と質問してきたことに端を発する。

その後、二人であれやこれやと議論を重ねた結果、このような研究対象に対しては、すでに井上史雄（2008）によって既存の社会言語学とはやや異なる切り口から方言を扱う「社会方言学」が提唱されているという先例に倣って、新たに「社会音声学（socio-phonetics）」という枠組みを付与するのが適切なのではないかという点で合意に達することとなった。

その後、大橋紀子氏は筑波大学大学院、人文社会科学研究所博士課程に入学したのを契機として、この研究に着手する予定でいた。また、そのことを私自身も大いに楽しみにしていた。しかしながら、大学院入学後に大橋紀子氏は一身上の理由でこの学問から撤退することとなってしまった。このことは、私を深く悲しませ、大いなる落胆を禁じえなかった。しかしながら、本人の固い決意を尊重するのがベストであると判断した私は、強硬な反対意見を表明しなかった。

それにしても、せっかく前人未到の研究領域が立ち上げられたかもしれないその可能性を、ここでプツリと根絶やしにしてしまうことは、いかにも忍びない。そこで、小稿では大橋紀子氏と途中まで検討した「社会音声学」という新たな研究領域の名称と、ほんの入り口程度ほどのことではないが、その内容の片鱗とをここに文字化して、後進の研究に資することを目的とすることとした<sup>1</sup>。

## 1.2. 定義 社会音声学とは

言語学の1領域に社会言語学があるのと同様に、音声学の1領域に社会音声学（socio-phonetics）があつてしかるべきである。前者における定義のひとつである、亀井、千野、河野（1996:661-665）には、

---

<sup>1</sup> 今般、この着想を文字化することに関して筆者が大橋紀子氏に同意を求めたところ、特に異存はないという返答であったので、敢えてこのような形で文字化に踏み切ることとした。

言語研究の一分野で、言語の体系およびその働きと、それらのあり方を規定する社会的・文化的な諸要因との間の関係を、主な研究対象とするもの。言語社会学ともいう。

という文言が見える。したがって、筆者はこの定義を参考にして、暫定的に社会音声学を次のように定義しておく。

音声学の一分野で、音声の産出、伝播、受容・認知の3大側面に影響を及ぼす社会的・文化的な諸要因を探究することを、主たる研究目的とする。

ただし、補足しておけば、従来の音声学というものが人類一般の言語音を研究対象とする一般音声学にせよ、個々の具体的な言語音を対象とする個別音声学にせよ、個人的特徴（de Saussureの術語に従えばparole）を中核に据えており、そこでは必ずしも社会的要因によるパラメータは十分に考慮されていなかった。筆者の提案する社会音声学は、まさにこのことへの省察に基づくものである。

### 1.3. 研究対象

社会言語学の研究対象は、かなり多岐にわたっている。たとえば、亀井、千野、河野（ibid.661-663）を参考にしてまとめれば、

- (1) ことばに対する個人の態度 好き嫌い
- (2) 個人の言語行動の型：場面によることばの使い分け  
待遇表現・丁寧さ（politeness）・あいさつの有無など
- (3) 2言語併用社会における個人の言語の使い分け  
コード変換（code-switching）
- (4) 言語的コミュニケーションにおける個人間のネットワーク

家族間・職場の同僚・近所の人たちなど、メンバーが異なると言語はどう変わるか？

- (5) 個人のコミュニケーション行動における言語、および非言語的表現とその効果
- (6) ある社会集団における使用語と、社会・文化・政治・経済などとのかかわり  
公用語・標準語・共通語・方言など
- (7) 情報の流通に関する諸問題  
マスコミ、人の移動と情報の流れ、など
- (8) 他の言語社会との接触によって生じる問題  
政治・経済・文化・軍事など
- (9) 言語政策にかかわる諸問題
- (10) 思考と言語・文学と言語・言語発達やコミュニケーション障害と社会との関係

などが挙げられている。したがって、これに準じて社会音声学の研究対象を考えれば、

(1) 言語音に対する個人の態度

具体的には、好みの音と嫌いな音による類別など。人によっては、[ m ] の音は柔らかい響きなので好きだが、[ z ] は耳の底がくすぐったくなるようでゾツとする、といった評言などを積極的に取り込む。

(2) 個人の音声言語行動の型：場面による音声の使い分け

待遇表現にかかわる音声・丁寧さ (politeness) の音声などがその典型。調音 (articulation) 以前に、声の出し方 (phonation) にもかかわる。いわゆる「猫なで声」とか、「ぶっきらぼうな言い方」など

(3) 2言語併用社会における個人の音声言語の使い分け

音声のコード変換 (code-switching) は、現在、筆者が指導している韓国人留学生の研究テーマにもかかわるが、韓国人が自然談話の中で外来語としての日本語を発話すると、その直前に軽微なポーズまたは当該語彙の後半にかけてのピッチ上昇が見られる、という事例などがこれに含まれる。

(4) 音声言語のコミュニケーションにおける個人間のネットワーク

家族間・職場の同僚・近所の人たちなど、メンバーが異なると音声言語はどう変わるか？ たとえば、自分から父親に対して発する音声と母親に対するそれとは、どのように異なるか、とか隣のおばさんだったらどうか、など。

(5) 個人のコミュニケーション行動における音声言語、および非言語的表現とその効果

「ああ、おながすいた」という場合に、無色透明の「棒読み」的に音声化した場合と、舞台俳優もどきの感情を入れ込んで音声化した場合との違い、など。

(6) ある社会集団における使用音声と、社会・文化・政治・経済などとのかわり

公用語・標準語・共通語・方言などの音声。たとえば、大阪の人が東京の人と酒を飲んで歓談しているときに、突然郷里の友人からケータイがかかってきたりすると、「顔、あこーなってんよー」と、分節音はもとより、プロソディーまでもそっくり入れ替わってしまうような場面的要因など。揉み手をして電卓をはじくときの商人の音声的特徴なども、ここで扱うことができる。

(7) 情報の流通に関する諸問題

マスコミ、人の移動と音声情報の流れ。たとえば、「新型インフルエンザ」に関する情報と、鳩山内閣のもとで遂行され

た「必殺仕分け人」に関する情報とでは、どちらのほうが聴取者の耳に達するまでの時間が短かったか？ また、そのときの基本周波数とか意味強調で用いられた時間長、音圧などには、どの程度の顕著な差があったのか？ など。

(8) 他の音声言語社会との接触によって生じる問題

政治・経済・文化・軍事など。アメリカと急速接近した、第2次世界大戦後の日本では、しばしば「女性の声が高すぎる」「あれでは、まるで子どものようだ」などと、ゲルマン民族から理不尽な批評を押し付けられて、一時期日本人の女性ジャーナリストがむりをして自分の声域よりも低い声を出していたことがある。このような現象は、ここで扱うことができる。

(9) 音声言語政策にかかわる諸問題

ヒットラーの演説、スターリンの演説、オウム真理教の麻原彰晃の演説...など。

(10) 思考と音声言語・文学と音声言語・音声言語発達やコミュニケーション障害と社会との関係

たとえば、言語といえは従来は文字言語を中心にみることで定着していた。しかし、音声言語の側から言語現象を捉えることによって、どちらかといえは話し手の立場に立って現象を捉えていた従来の言語学（特に理論言語学）から脱皮して、話者とは対極にある聴取者の立場からみた言語研究が可能になる、というメリットが見込まれる

などということになる。ただし、上に挙げた(1)から(10)までのすべてが、これから展開してゆく社会音声学にとって不可欠の研究対象となるか否かは、現段階では不明である。

#### 1.4. 研究方法

先に見た亀井、千野、河野 (ibid.:661-665) によれば、社会言語学における研究方法は大別して、以下の5点に集約される。

- (1) 横断的 (共時的) 研究と縦断的 (通時的) 研究
- (2) 単独対象型研究と対比 (対照) 型研究
- (3) 記述的研究と実践的 (応用的) 研究
- (4) その他: 実証的 (調査中心主義) と理論的、言語重点的と言語外重点的、など
- (5) 隣接科学とのコラボ: 社会学・文化人類学・談話分析・会話分析・言語行為・語用論、など

一方、音声学の研究方法に関しては、上記の各項とかぶるところもあるが、音声学独自の方法論としては、

- (1) 調音音声学
- (2) 音響音声学
- (3) 聴覚音声学

の3大分野が考慮されなければならない。すなわち、社会音声学が持っている一面は社会言語学的研究方法の援用だが、もう一面では、当然のことだが音声学的研究方法をも兼備していなければならないということにほかならない。

具体的に述べれば、たとえば記述的研究による社会音声学では、面接調査による資料収集の際に調音音声学的記述にとどまらず、高品位の録音(場合によっては録画)をも並行して実行し、後日それらのデータをことごとく音響解析にかけて定量化することが不可欠である。さらに、場合によっては実験室まで被験者にご足労をお願いして、事象関連電位を用いた脳波

実験を行うことも視野に入れておく必要がある。

技術論的側面のほかに理論的側面での特徴を述べれば、周知のように理論言語学が個々の現象の背後に仮定される一般性の高い原理を模索することに腐心するのに対し、社会言語学は個々に存在する言語現象そのもののバリエーション（変種）に興味を持つという点で両者が基本的な視点を異にする。つまり、卑近な表現に改めれば「個の背後にある抽象的な原理」を追求する理論言語学に対し、社会言語学は「個そのものの具体的な側面」に興味を示してきたということにほかならない。

しかしながら、筆者がこれから展開して行こうとしている「社会音声学」を既存の「一般音声学」と対比した場合には、上に指摘した一般言語学と社会言語学におけるほどの顕著な対立は存在しないという点に注目して欲しい。

すなわち、両者ともにいわゆる「ラング」ではなく「パロール」のレベルで、個々に見られる具体的な音声現象に興味を持つという点における共通性が存するからにほかならない。ただし、社会音声学に特徴的な点は、純粹にparoleの側面に終始する一般音声学に対し、Coseriu（1981）のnormaあるいは城生佰太郎（1986）の「音芯論」のように、1段抽象化の度合いを増した、よりlangueのレベルに近い部分を模索することにならざるを得ないところである。

すなわち換言すれば、社会音声学では、同じSaussureの「社会的所産」といっても、過度の抽象化を行うことなくその手前でとどめ、そこに見られる幾種類かの具体的な変種を重く見るということにほかならない。このことはまた、伝統的なSaussureによる「ラング」と「パロール」による2分法の破綻を宣告し、対案としてCoseriuの言うnormaあるいは城生佰太郎の「音芯論的レベル」の必要性を説くことにもつながる。ただし、現段階においては、そのあたりの具体的な扱いに関しては未完である。



## 2 「社会音声学」的視点による研究事例

モンゴル語における非示差的アクセントの社会習慣的型に関する研究

大橋紀子(2008)で扱われたテーマである。従来のアクセント研究は、音韻論的側面から行われるのが一般的な方法であった。このため、モンゴル語、トルコ語、フランス語など、いわゆる「音韻論的に無意味なアクセント」とされる諸言語のアクセント研究はほとんど行われずに等閑視され続けてきた。

このような動向に対し、まず服部四郎(1973)などが「アクセント素」という概念を提唱して「すべての言語、すべての方言には一定のアクセントが存在する」と仮定し、非示差的なアクセントというものは、たまたまそこに見られるアクセントの型が1種類のみであるにすぎないために対立がないことを強調して、モンゴル語などのアクセント研究に対する道を切り拓いた。ただし、この段階ではまだ音韻論の枠組みにおける議論であった。

続いて、城生佰太郎・三上司(1981)、城生佰太郎(2001)などが、オートセグメント理論や実験音声学的方法を用いることによって、やはりモンゴル語のような非示差的アクセントを有する言語にも一定のアクセント・パターンが社会習慣的に実在することを指摘した。服部四郎との違いは、音響音声学的観点から実験を行い、その結果を踏まえた上でアクセントを音声学的観点から論じたという点である。

大橋紀子(ibid.)は、このうち後者の延長線上に立ったもので、実験音声学的方法を用いて城生佰太郎の音響音声学的研究をさらに推し進めると同時に、世界で初めて事象関連電位を用いた脳波実験を併用することによって、たとえば、

現代モンゴル語では短母音のみによって構成されている3音節単語の場合、HHLというパターンは許容できない

などという聴覚情報処理系の営みが実在することを新たに指摘した。

ここで、これらの研究成果をひとことでまとめると、現代モンゴル語のアクセントは非示差的ではあるものの、社会習慣的に一定した音声学的実現形(音声学的な型)が実在することが明らかにされたということである。すなわち、別言すればそこに一定したパターンとして実現されるアクセントにみられる社会習慣性の存在を指摘したということにほかならない。

このように非示差的でありながら、paroleのレベルよりは1段langueのレベルに近い現象を「型」として体系的に扱うためには、既存の音声学や言語学は必ずしも適当な方法論とは言い切れない。すなわち、音声学はあくまでも個々の具体的な現象そのものと対峙するところから研究に着手する。一方、社会言語学を含めた広義の言語学は、現象そのものに対する扱い方の違いこそあれ、究極の目的は目前にある具体的な現象の背後に仮定される一般性の高い原理の模索にほかならない。したがって、いわば中途半端な抽象化は、どちらの領域にもなじまないこととなる。ここに、新たな「社会音声学」を提唱する正当な理由がみられる。

### 3 「社会音声学」の必要性

既存の「社会言語学」は、チョムスキーという一人の学徒が創り上げた生成文法理論などとは異なり、長い年月をかけて大勢の人たちによって試行錯誤を繰り返しつつ、いわば増改築を重ねてきた建物のような状況にあるため、処々方々にほころびや歪みが生じている。だからこそ、その欠陥部分を補う努力は今までもそれ相応に行われてきたし、これからも旺盛に試みられなければならないものとする。したがって、このような状況に照らして小論の筆者が主張するような、従来の社会言語学では十分に扱えなかった事象に対して、言語学ではなく音声学の立場から挑むあらたな試みにも、相応の存在理由があるものとする。

ちなみに、わが国では音声学という学問を言語学に包含される下位部門だと認識している研究者が大勢を占めているが、音声学に対する見解には

もうひとつ、これを言語学とは異なる独立科学であるとする立場がある。たとえば、アメリカでこそ音声学は不毛であるが、言語学科とは別に音声学科を擁する北欧やフランスなどでは、伝統的にRousselot, Grammontにはじまり、比較的新しいところではMalmbergなどにいたるまで多くの音声学者たちによって共通理解されている。

なお、そのあたりの事情に関しては、城生佰太郎(2005)(2008)ほかに述べてあるので、ここでは紙数の関係から省略する。そうして、結論だけを述べればこのような観点から音声言語を捉えるという方法論も、あらたに立ち上げる「社会音声学」ならではの試みであるとすることができよう。

また、研究テーマについて触れておけば、金田一春彦(1942)によるガ行鼻音に関する研究、ヒトの自然言語音と器械による合成音に関する研究、風邪をひいたときの声の研究...などは、いずれも社会音声学の研究対象となるだろう。さらに、ことばの「間」、テンポ、流れ、空気を読む...などプロソディ現象の総括・統合にかかわる音用論的諸問題も、大きく「話線の流れに関する社会音声学的研究」として掲げることが可能ではないかと考えている。

いずれにせよ、今後の進展に大いなる期待を寄せることのできる新領域である。

#### 参考文献

- 井上史雄(2008)『社会方言学論考』、明治書院  
大橋紀子(2008)『モンゴル語のアクセントに関する実験音声学的考察 音声学的アクセントの類型化を視野に入れて』、筑波大学人文学類、一般言語学コース卒業論文  
亀井孝、千野栄一、河野六郎編著(1996)『言語学大辞典第6巻 術語篇』、三省堂  
金田一春彦(1942)「ガ行鼻音論」(『日本語音韻の研究』1967、東京堂に再録)  
コセリウ、E.原誠、上田博人共訳(1981)『言語体系』コセリウ言語学選集2、三修社  
城生佰太郎・三上司(1981)「モンゴル語のアクセント オートセグメント理論による分析」、『文藝言語研究』言語篇6号:143-165.筑波大学文芸・言語学系

- 城生佰太郎(1986)「音芯論の提唱 非示差的特徴の研究」『言語』15巻10号:70-76.  
大修館書店
- 城生佰太郎(2001)『アルタイ語対照研究 なぞなぞに見られる韻律節の構造』、  
平成12年度科学研究費補助金による助成出版、522p. 勉誠出版
- 城生佰太郎(2005)『日本音声学研究 実験音声学方法論考』、平成16年度科  
学研究費補助金による助成出版、492p. 勉誠出版
- 城生佰太郎(2008)『一般音声学講義』、勉誠出版
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」『言語  
の科学』第4号:1-61.東京言語研究所